

國學院大學學術情報リポジトリ

宗教観と青年期適応に関する研究：
宗教観認知行動的変数およびストレスコーピングに
関する相関研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山崎, 洋史 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001493

宗教観と青年期適応に関する研究

—宗教観認知行動的変数および ストレスコーピングに関する相関研究—

山 崎 洋 史

— 論 文 要 旨 —

本研究は、宗教観の個人的認知的側面に注目し、認知行動的セルフモニタリング構造において、その認知が、適応行動・適応感に影響を与えることを明らかにするのが目的である。そのため宗教観の個人的認知的変数であるスピリチュアリティ的認知（信念）が、適応感の変数である Subjective Well-Being（主観的幸福感）、および適応行動の変数である対人ストレスコーピングに与える影響を、因子相関分析・多変量解析によって実証していく。質問紙配布・即時回収。因子分析を各尺度に実施し、各因子間における影響を測るために重回帰分析を行った。その結果、スピリチュアリティ的認知(信念)「人生の意味因子」が、Subjective Well-Being（主観的幸福感）「自己信頼感因子」「満足感因子」「幸福感因子」のすべてに影響を与えることが明らかになった。また、スピリチュアリティ的認知（信念）「人生の意味因子」「神の守護因子」「因果応報因子」が、対人ストレスコーピング行動としての「リフレーミング型コーピング因子」に影響を与えていることが明らかになった。

1 問題

1-1 今日の宗教観

現代の日本において「信仰を持っている」人口は、極めて少ない。國學院大學日本文化研究所の学生宗教意識調査では「現在、信仰を持っている」と答えた学生は、非宗教系で7.7%、宗教系学生を含めても10.2%であった。また「宗教は危ないと考えるか」について、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」との回答は60%以上であった（井上, 2018, pp.45-92）。実際に宗教集団や宗教団体への所属度は低く、青年では1割にも満たないと言われている（石井, 2007, p.141）現状は過去10年以上、変動していない。宗教集団を「礼拝や伝道活動といった宗教活動を行う集団のことで、かつ教義・儀礼行事・信者・施設の4つの要件を満たしたもののこと」、宗教団体を、「宗教集団の内部に地位や役割の分化が生じ、地位の体系が作り出されて組織化したもののこと」（石井, 2007, p.35）との定義を

用いるならば、日本の現状は、その範疇から大いに外れることとなる。

一方、同調査において「宗教に関心がある」と答える学生は、70～80%にのぼり、「神の存在」「仏の存在」「靈魂の存在」「先祖様に守られている」「死後の世界の存在」については、過半数の者が「ありうと思う」と答えている。さらに、「宗教は人間に必要と思うか」「宗教を信じると心のよりどころができるか」のような宗教に対するポジティブな認知も、回答者の過半数が肯定的選択（井上，2018, pp.45-92）をしているのである。この傾向は過去10年間変わっていない。

今日、パワースポット、聖地巡礼、御朱印帳記帳等の行動にあらわれているように一般的関心は極めて高い。日常生活ルーティンにおいて宗教に起因する行事への参加行動は常態化しており、神社、仏閣、教会等で心が癒され、満足感や、幸福感を得て、日常のストレス事態が起きた時に、それを解消するための行動（ストレスコーピング）を適応的に変化させること等、その宗教に関連する行事参加が社会適応上、有効なものとなっているのである。

1-2 宗教観の集団的組織的側面と個人的認知的側面

宗教に関連する行事参加を、社会的適応行動に成らしめる理由は何であろうか。金児（1997, p.293）は、こころの深層に加護観念と靈魂観念が隠れていて、当人もそれを宗教だとは通常意識しない宗教性を持っている。加護観念とは、年中行事としての軽い宗教との結びつきに親しみを感じ、自然に対しても神仏のように謹んだ気持ちをもった宗教性のことである。靈魂観念とは靈的存在への信仰や死者への畏怖の感情、あるいは願い事を叶えてくれたり、たたりや罰を与えてくれたりするような人知を超えた存在に対する畏怖の念、あるいは輪廻転生を信じること等、そうした観念が合わさったもののことである。この2つの観念は日本人が脈々と受け継いできた宗教観といえる等と説明をしている。この宗教的関係性や、その程度を表現する概念としての「宗教性」は、「個人における宗教への関わり」を意味し、「宗教観」を「宗教に対する考え方」「宗教に関する認知スタイル」と、ここで定義する。

宗教観の認知的枠組み如何によってその後の人間行動が規定される。初詣、墓参り、クリスマス等の日常行動化の要因は、社会適応と宗教観と関連性が実証されることにより、その因果関係が明らかとなっていくのである。山崎は2017年に、現代青年の「宗教観」すなわち「宗教に対する考え方」「宗教に関する認知スタイル」の構造を明らかにするために、宗教観尺度（谷，2007）を用いて調査を実施した。その結果、「宗教観」の構造として「F1：安らぎ・心の拠り所因子」「F2：排他・強制因子」「F3：守護・見守られ因子」の3因子

が抽出された。「F1：安らぎ・心の拠り所因子」は、「信仰心は、心の拠り所や生きがいとなる」「宗教は、人の手に余る悲しみを和らげ、救いとなる」等から構成される。「F2：排他・強制因子」は、「信仰のために、他に迷惑をかけても気づかなくなる」「宗教により思想が偏り、物事を客観的、科学的、論理的に見ることができなくなる」「宗教には排他性や他への攻撃性、差別がみられる」等から構成される。「F3：守護・見守られ因子」は、「守護霊、守護神に守られていると思う」「神や仏は存在する」「いつも、神や仏に見守られていると思う」等から構成される。内容的には、「F1：安らぎ・心の拠り所因子」「F2：排他・強制因子」は、集团的組織的な宗教に関する客観的要素や側面を表している。すなわち「F1：安らぎ・心の拠り所因子」は、集团的組織的にポジティブ要素や側面を、「F2：排他・強制因子」は、集团的組織的にネガティブ要素や側面を構造として明示している。一方、「F3：守護・見守られ因子」は、個人的認知的信念等の主観的要素や側面を示していることが明らかとなった。

宗教に関する意識調査で、日本における宗教軽視の風潮、宗教そのものへの警戒、宗教や宗教性を感じさせるものに対する慎重さ、否定的拒否的反応等は、宗教集団や組織の活動に対する傾向が強い。それは「F2：排他・強制因子」の項目内容を検討することから明らかである。よって、その集团的組織的な客観的である側面ではなく、個人的主観的である認知的信念として「F3：守護・見守られ因子」が、広く受容されていることが明らかとなった。特に宗教を「信仰していない群」において、「F3：守護・見守られ因子」が、青年期の適応感やアイデンティティ確立に影響していることが示されている（山崎, 2017, pp.75-76）。

すなわち、明らかになった宗教観3因子のうち個人的主観的である認知的信念のあり方が、神社、仏閣、教会等で心が癒され、満足感や幸福感を得る、日常のストレス事態が起きた時に、それを解消するための行動（ストレスコーピング）を適応的に変化させること等、その宗教に関連する行事参加を社会適応上有効なものとしているのである。

1-3 宗教観の個人的認知的側面とスピリチュアリティ的認知（信念）

宗教観には集团的組織的側面と個人的認知的側面の両方の構造が含まれていることはすでに述べた。適応に影響を与える主観的な個人的認知的信念の構造を抽出するために「スピリチュアリティ的認知（信念）」を取り上げていきたい。

宗教観とスピリチュアリティの関係性については、「スピリチュアリティという語は、従来の宗教という言葉が持つ組織や制度という側面とは切り離れたところで、個人の体験として存在するある種の宗教的意識に重点が置かれている」（安藤, 2007, pp.11-33）として、

宗教感から組織制度を切り離した個人的な位置づけであるとしている。また、スピリチュアリティは、「宗教の核心部分にあたるが、組織宗教では形骸化したり、表現が抑制されたりする性質をもつ」（堀江，2007，pp.141-154），すなわち宗教とスピリチュアリティは、概念的コアは同一であるが、宗教から組織や制度という側面を切り離した、個人的側面であるとしている。弓山（2010，p.349）は、「スピリチュアリティは教義・儀礼・組織を備えた教団宗教から離れた非制度的かつ個人的な宗教意識のこと」と定義している。本研究では、宗教観の個人的認知的側面の構造を抽出していく目的で「スピリチュアリティ的認知（信念）」を鍵概念とした。

スピリチュアリティの定義は多様である。例示するならば、「危機で喪失しかけた自己を保持，回復，成長，確立しようとし，かつ，受け入れるしか仕方がない自己の状況を受け入れる際の意味付けにしようとする」のがスピリチュアリティである（窪寺1997，p.216），「人間に本来的に備わった生の意味や目的を求める無意識的欲求やその自覚を言い表す言葉」である（安藤，2007，pp.11-33）等，危機的な状態のとき，不安定な状態のとき，自失状態のとき等，自らの存在の意味や，生きる意味，新たな視点を探求し，腑に落ちることで，新たな活力を得ていこうとするためのエビデンスへの希求機能であるとするもの。また，スピリチュアリティの構造を分析し，「霊性（宗教性）：宗教がその役割を担っていたスピリチュアリティな次元の領域」「霊性（全人格性）：身体的心理的社会的，そして，スピリチュアリティな領域全てを含んだ全人格性」「霊性（実存性）：人生の意味，生きる意思，信念・信仰であり，主体的・主観的な自覚に関わる事柄」「霊性（大いなる受動性）：スピリチュアリティを絶対的な受動性として理解し，何らかの聖なるものに触れて生かされているという実感」西平（2007，pp.71-90）は，4つの因子がスピリチュアリティに関わっているとしている。

またエルキンス（David N. Elkins，1988）らは，臨床心理学の立場から，スピリチュアリティの定義を，「超越的次元の存在を自覚することにより生じる存在・経験様式のひとつである。それは自己，他者，自然，生命，至高の存在と考える何かに関する一定の判別可能な価値観によって特徴づけられる」「魂を養い，霊的側面を発達させるプロセスおよびその結果」と定義し，次の4仮説を挙げている。「人間の経験の中にはスピリチュアリティとしか呼びようのない次元がある。」「スピリチュアリティは人間的現象であり，潜在的には誰にでも起こりうる。」「スピリチュアリティは宗教と同じではない。」「スピリチュアリティを定義し，それを評価する測定方法がある。」さらに，スピリチュアリティの9因子構造なる測定尺度を開発した。「F1：超越的次元の存在（「見えない世界」の存在を信じ，繋がることで力を得ている認知）」「F2：人生の意味と目的（人生には意味があり，

存在には目的があるとの認知)」「F3：人生における使命（生への責任，天命，果たすべき使命があるとの認知)」「F4：生命の神聖さ（生命は神聖であるとの認知，畏怖の念)」「F5：物質的価値（金銭や財産は，最大の満足ではないとの認知)」「F6：愛他主義（誰もが同じ人間であると思う他人に対する愛他的感情)」「F7：理想主義（高い理想を持ち，その実現のために努力する行動)」「F8：悲劇の自覚（悲劇（苦痛，災害，病気，死等）の認知と，生きる喜び，価値の認知)」「F9：スピリチュアリティ的効果（スピリチュアリティは生活の中に結実するもので，自己，他者，自然，生命，何かしら至高なる存在等とその個人との関係に影響を与えるとの認知)」，スピリチュアリティ構造は，いわゆる宗教的活動ではなく，日常生活に潜在的な影響を与えるものである。

多くのスピリチュアリティに関する様々な研究において，一致する共通点は「スピリチュアリティは人間存在に意味を与える根源的領域であり，スピリチュアリティが生きる意味や人生に意味を見いだす根拠となるものである」（藤井 2010, pp.1-27）ことである。

よって本研究においては，宗教観構造の一つである個人的認知側面と内容的に一致する宗教の核心的部分としての「スピリチュアリティ的認知（信念）」尺度を用い，適応に関する調査を実施し，多変量解析を用いた分析を行い，その構造を明確にし，認知行動セルフモニタリングに於ける「スピリチュアリティ的認知（信念）」の影響を明確するために，適応の指標としての「心の健康」「気分・感情」の尺度である「Subjective Well-Being（主観的幸福感）」と「行動」「認知」の尺度である「対人ストレスコーピング」の関連について実証して行く。

1-4 Subjective Well-Being（主観的幸福感）とスピリチュアリティ的認知（信念）

社会に生き生きと健康的に適応している状態を意味している「肉体的，精神的，社会的に調和のとれたよい状態（Social Well-Being）」は，世界保健機関（WHO，1948）による健康の定義である。また，1998年に「spiritual and social well-being」として，新たに「spiritual」の単語を付加することが提案された。それは人間の尊厳や生きる意味の重要性を強調するための提案であった。その後，人間のネガティブな側面のみに注目するのではなくポジティブな側面も評価すべきとされ，適応を論じる時，客観的な側面だけではなく，個人的主観的な側面も重視するようになった。「Social Well-Being」を考える場合，社会的客観的な適応のみではなく，個人の主観的認知的心理的側面を重視する「Subjective Well-Being（主観的幸福感）」の研究が生まれるきっかけとなった。

「Subjective Well-Being（主観的幸福感）」は，個人の感情状態を含み，家族・仕事等特定の領域に対する満足や人生全般に対する満足を含む広範的な概念である（Diener, Suh,

Lucas, & Smith, 1999, pp.276-372)。日本においても、スピリチュアリティと同様、青年期以降のすべての発達段階で主観的幸福感研究が着手され始めた（伊藤他, 2003, p.277）。また、具志堅（2011, p.103）は、スピリチュアリティ的認知（信念）と、精神的健康との間に正の関連があることを示唆している。よって、本研究では、スピリチュアリティ的認知（信念）の影響を測定する主観的適応の変数として、「Subjective Well-Being（主観的幸福感）」を用いることとした。

1-5 対人ストレスコーピングとスピリチュアリティ的認知（信念）

社会生活の中に、様々なストレスがある。社会生活の基本的構成単位は人間である。対人関係におけるストレスが、日常の適応感に大きく影響を及ぼしているのである。ストレスを受けた時、どのような対処行動（対人ストレスコーピング）を選択していくか、どのような適応的行動で乗り切っていくのか、行動の選択は、個人の主観的認知によって異なる。対人ストレスコーピングの構造は、対人関係を改善する「ポジティブ関係コーピング」、対人関係を放棄・崩壊する「ネガティブ関係コーピング」、問題の棚上げをする「解決先送りコーピング」の3分類される構造であると加藤（2000, 2003）は分析した。

ストレスの低減、適応の促進させる視点からは、「他者に好意的な印象を与え良好な関係を築くこと」が重要で、そのような行動を選択することにより自らのストレス反応を低下させることができる（加藤, 2002, pp.147-152）。逆に、ネガティブ関係コーピングによる、他者への攻撃性は、他者からの悪意や軽視等猜疑心や不信感につながるということがわかっており、更なるストレスが増幅していくのである。

認知行動的セルフモニタリング構造（山崎, 2012）において、認知・信念が行動・感情等に影響を与えることが明らかになっている。対人ストレスコーピング行動の適切な選択により適応を促進していくために影響を与える。

本研究ではスピリチュアリティ的認知（信念）が与える影響を検討する行動変数として、「対人ストレスコーピング」を取り上げて検討していく。

2 目的

WHOにより宗教観・宗教性・スピリチュアリティの重要性が提唱され、社会適応や精神的健康との関連が検討されながらも、日本においては実証的研究の数は多くない。また、スピリチュアリティ概念の研究は行われているが、スピリチュアリティ的認知（信念）と日常行動や適応の変数との関連をエビデンスに基づいて明示している研究は少ない。また、

認知行動的セルフモニタリング構造（山崎，2012）において，認知・信念が行動・感情等に影響を与えることが明らかになっている。

本研究の目的は，宗教観の個人的認知的変数としてのスピリチュアリティ的認知（信念）が，適応の変数としての Subjective Well-Being（主観的幸福感），およびストレスに対する対処行動の変数として対人ストレスコーピングに及ぼす影響を，質問紙調査による因子相関係数によって明らかにしていくことである。

①宗教観構造の因子として「個人的認知的側面」を項目内容的に一致する「スピリチュアリティ的認知（信念）」の精細構造を，質問紙調査を実施し，多変量解析を用いた分析を行い，明らかにしていく。

②認知行動セルフモニタリングに於ける「スピリチュアリティ的認知（信念）」が，適応の指標としての「心の健康」「気分・感情」「認知」の尺度である「Subjective Well-Being（主観的幸福感）」との関連について因子相関分析により実証していく。

③認知行動セルフモニタリングに於ける「スピリチュアリティ的認知（信念）」が，適応の指標としての「行動」「認知」の尺度である「対人ストレスコーピング」との関連について因子相関分析により実証していく。

3 方法

3-1 質問紙調査法

集団調査法。授業終了後（都内女子大学：心理学3講義），倫理的配慮（調査協力者に配布した質問紙に，研究の目的，倫理的配慮に関する説明を明記。調査結果は本研究の目的以外に使用されない。得られたデータは個人が特定されない形で処理・分析を実施，研究終了した時点で消去，破棄。調査への協力は本人の自由意志であること。回答したくない項目は空欄のままでよいこと，回答しないこと，回答を途中でやめてもよいこと，そのための不利益はないこと，本研究に関する問い合わせ先等が含まれる。質問紙への回答をもって，協力の了解を得たものとした。（大学倫理規定に基づく審査の上承認された質問紙を使用）質問紙配布。無記名，記入終了後即時回収。

3-2 質問紙の構成

質問紙の構成は，①「フェイスシート」：年齢・性別の記述，②「スピリチュアリティ的認知（信念）尺度」26項目5件法：本研究では，宗教色の薄い日本において一般の人々が抱いているスピリチュアリティ的認知(信念)へ焦点を当てる。尺度は6カテゴリーによっ

て構成されている（具志堅，2011）。人生の意味：5項目，輪廻：4項目，神の守護：4項目，因果応報：4項目，魂の永続性：4項目，心象の現実化：5項目，③「主観的幸福感（subjective well-being）尺度」15項目4件法：WHOの開発した心の健康自己評価質問紙（Subjective Well-Being Inventory）をもとに作成された尺度である。subjective well-being（主観的幸福感）研究では，認知的側面及び情緒的側面の両方を測定する必要がある。本尺度はそれが測定できる。尺度は，5カテゴリー15項目の構成であり，人生に対する前向きな気持ち（満足感）：3項目，自信：3項目，達成感：3項目，人生に対する達成感：3項目，至福感：3項目。④「対人ストレスコーピング尺度」：人間関係に起因したストレスを感じる出来事に対する対処の仕方，すなわち対人ストレスコーピングの個人差を測定する加藤（2000）の「大学生用対人ストレスコーピング尺度（Interpersonal Stress-Coping Inventory；ISCI）」，尺度は，3カテゴリー34項目から構成されている。ポジティブ関係コーピング：16項目，ネガティブ関係コーピング：10項目，解決先送りコーピング：8項目。

3-3 調査期間

2018年10月

3-4 分析対象

203名の質問回答紙回収。回答の不備や欠損値等を検討し，有効回答数135名を分析対象とした。

4 結果と考察

4-1 スピリチュアリティ的認知（信念）尺度の信頼度と因子分析

各因子間に緩やかな相関が予想され因子分析は，主因子法，Promax 回転を行った。その結果，固有値を配慮し6因子が抽出された。各因子の因子負荷量.35以上の項目を検討し，全26項目が6因子に分割された。（Table 1）第1因子は「死というのは，魂が体から離れることです。体はなくなっても魂は生き続けます。」等の質問4項目，先行研究との整合性を検討し因子名として「F1：魂の永続性」と命名。第2因子は「人生を振り返ってみると，『さまざまな経験が結局は役に立っている』ことがわかります。良いことも不都合なことも，単なる偶然ではなく，何かの意味や必要性があって起こっているのです。」等の7項目，「F2：人生の意味」と命名。第3因子は「神様はいつも，あなたのことを見

Table 1. スピリチュアリティ的信念尺度 因子分析結果

質問項目		I	II	III	IV	V	VI
F1:魂の永続性 ($\alpha=.93$)							
6	死というのは、魂が体から離れることです。体はなくなっても魂は生き続けます。	.95	-.15	-.01	.07	.00	-.02
26	死によって人間の存在が完全に消滅して無になることはありません。体が死んでも魂は存在し続けるのです。	.94	.05	-.01	-.06	.03	-.01
12	死ぬということとは、体から離れて生きるといことなのです。体が死んだとしても、魂が消え去ることはありません。	.92	.01	-.09	-.08	.10	.02
18	人が死ぬとき、死ぬのは体だけです。魂は体から離れ、別の世界へと移っていくのです。	.70	-.03	.02	.06	.12	-.09
F2:人生の意味 ($\alpha=.85$)							
1	人生を振り返ってみると、「さまざまな経験が結局は役に立っている」ことがわかります。良いことも不都合なことも、単なる偶然ではなく、何かの意味や必要性があって起こっているのです。	-.09	.94	-.17	-.06	.06	-.17
15	人生で直面する出来事は、良いことも、つらいことも、何かの意味や必要性があって生じることです。そこから重要なことを学習し、最終的に人生を向上させるための機会なのです。	-.07	.65	.03	.00	-.01	.05
23	一見、不幸に思える出来事でも、長い目で見れば、それが幸運につながるきっかけだったということがわかります。不幸の中には幸運の種が隠されているものなのです。	-.06	.59	-.09	.01	.03	.17
21	人生で起こる出来事や、人との出会いは、あなたが人間として必要なことを学び、成長するために、見えない縁によってやってきます。単なる偶然ではないのです。	.07	.58	.23	.04	.05	-.13
25	良いことが起こると期待している心には、良いことを引き寄せる力が働きます。幸運につながるチャンスがめぐってくるのです。	-.01	.55	.18	-.04	.03	.11
7	人生の挫折や行きづまりには、そこから学ばなければならない「何か」があるのです。あせらずに、それを受け入れると、最終的にはプラスの結果となって現れます。	.08	.55	-.06	.09	-.12	.16
24	良いことも悪いことも、何かしたことにはいつかどこかで、それに見合った結果が現れます。他人に与えた親切は、思いがけないところで幸運となって戻ってくるものです。	-.07	.42	.05	.21	-.01	.20
F3:神の守護 ($\alpha=.91$)							
3	神様はいつも、あなたのことを見ています。あなたを助け、守ってくれています。	.10	-.08	.91	-.03	-.10	-.06
20	人として良心に従って、できる限りの努力をする人には、必ず神様の助けが得られます。自分にとって良い方へいくように、守ってくれるのです。	-.02	.08	.90	-.06	.02	-.07
8	一日一日を懸命に生きていけば、自分の果たすべき役割をきちんと果たしていれば、必ず、神様の守護が得られます。人生をよりよい道へと導いてくれるものなのです。	-.11	-.06	.89	.02	.09	.03
13	人生でどんなに困難な事態が起こっても、神様の守護を信じ、正しい行いをしている人に、必ず光明がさし、助けが得られます。	-.09	-.09	.83	-.01	.13	.07
F4:因果応報 ($\alpha=.83$)							
17	人の行動は、良いことも悪いことも最終的にはその人に戻ってきます。他人を不幸にするような行為をすれば、今度は必ず自分が不運や不幸に見舞われることになるのです。	-.05	-.01	-.03	.94	.09	.00
11	人が行った行為はやがて必ずその人自身にはね返ってきます。人を傷つける行為をすれば、いずれ自分が別の人から傷つけられることになります。	.01	.01	-.06	.90	.01	.01
2	あなたが他人に与えたのと同じものが、必ずあなたのもとへ戻ってきます。誰にも知られないように親切な行いをすると、それがめぐりめぐって自分のところに戻ってくるのです。	.16	.14	.24	.38	-.19	.01
F5:輪廻 ($\alpha=.86$)							
19	前世で人から感謝された行いは、現世での好運となって現れます。前世で人を傷つけた経験は、現世でそのつけを払うことになります。	.11	.03	.03	-.03	.73	.10
14	現世での人との縁は、前世からつながっているものであり、来世へと続いていくものです。	.14	.02	.08	-.02	.66	.21
9	神様はいつも、あなたのことを見ています。あなたを助け、守ってくれています。	.25	-.14	.00	.07	.65	.03
4	人の魂は、前世から現世、そして来世へと、いくつもの人生を経験します。現世はその一つなのです。	.16	.22	.09	.07	.46	-.28
F6:心象の現実化 ($\alpha=.75$)							
10	あなたが心で思ったことは、現実となって現れてくるものです。心の中でイライラした感情をいだいていれば、イライラするような出来事が次々に起こってくるのです。	-.20	-.07	-.08	.07	.16	.83
22	積極的に明るいことを考えれば、その思いはかない、幸福を手にすることが出来ます。悪い結果ばかり考え、思い悩んでいると、実際に不幸な出来事に見まわれるものです。	.19	.14	.07	-.02	-.10	.59
16	「こうなったちやだな」という不安感を強くいだくと、その思いは現実化してしまいます。心で思ったことは、実際の出来事を引き寄せる力があるのです。	.00	.27	.01	-.14	.08	.43
5	心が心で思ったことは、実際の出来事として現実化します。積極的に明るいことを思えば、好運がやってくるのです。	.16	.20	.06	-.01	-.13	.42
因子間相関							
I			.40	.57	.43	.58	.31
II				.65	.59	.20	.61
III					.54	.53	.43
IV						.25	.44
V							.14

ています。あなたを助け、守ってくれています。」等の4項目からなり、「F3:神の御守護」と命名。第4因子は、「人の行動は、良いことも悪いことも最終的にはその人に戻ってきます。他人を不幸にするような行為をすれば、今度は必ず自分が不運や不幸に見舞われることになるのです。」等の3項目、「F4:因果応報」と命名。第5因子は、「前世で人から感謝された行いは、現世での好運となって現れます。前世で人を傷つけた経験は、現世でそのつけを払うことになります。」等の4項目、「F5:輪廻」と命名。第6因子は、「あなたが心で思ったことは現実となって現れてくるものです。心の中でイライラした感情をいだいていけば、イライラするような出来事が次々に起こってくるのです。」等の4項目、「F6:心象の現実化」と命名。全6因子の累積寄与率は68.44%であった。Cronbachの α 係数は「F1:魂の永続性」 $\alpha = .93$ 。

「F2:人生の意味」 $\alpha = .85$, 「F3:神の守護」 $\alpha = .91$, 「F4:因果応報」 $\alpha = .83$, 「F5:

Table 2. 主観的幸福感尺度 因子分析結果

質問項目	I	II	III
F1:自己信頼感 ($\alpha = .80$)			
4 ものごとが思ったように進まない場合でも、あなたはその状況に適切に対処できると思いますか	.86	-.16	-.06
6 今の調子でやっていけば、これから起きることにとも対応できる自信がありますか	.79	-.14	.17
9 自分がやろうとしたことはやりとげていますか	.53	.20	-.05
5 危機的な状況（人生を狂わせるようなこと）に出会ったとき、自分は勇気を持ってそれに立ち向かって解決していけるという自信がありますか	.50	.08	-.04
8 これまでどの程度成功したり出世したと感じていますか	.46	.19	-.01
11 将来のことが心配ですか	-.44	-.28	.11
F2:満足感 ($\alpha = .70$)			
13 自分がまわりの環境と一体化して、欠かせない一部であるという所属感を感じるがありますか	.08	.67	-.19
12 自分の人生には意味がないと感じていますか	-.10	-.67	-.02
1 あなたは人生が面白いと思いますか	.04	.66	.18
15 自分が人類という大きな家族の一員だということに喜びを感じるがありますか	-.08	.60	-.05
10 自分の人生は退屈だとか面白くないとか感じていますか	-.11	-.52	-.20
14 非常に強い幸福感を感じるがありますか	-.16	.47	.39
F3:幸福感 ($\alpha = .77$)			
3 ここ数年やってきたことを全体的に見て、あなたはどの程度幸せを感じていますか	.09	-.04	.88
2 過去と比較して、現在の生活は幸せですか	-.07	-.10	.82
因子間相関	I	II	III
I		.67	.52
II			.68

輪廻」 $\alpha = .86$, 「F6: 心象の現実化」 $\alpha = .75$ であった。内的整合性は全下位因子が保たれている。

4-2 主観的幸福感尺度の信頼度と因子分析

各因子間に緩やかな相関が予想され因子分析は、主因子法、Promax 回転を行った。因子負荷量の小さな1項目を除外し、残りの14項目で再分析を行った。その結果、固有値を配慮し3因子が抽出された。各因子の因子負荷量 .40以上の項目を検討し、14項目が3因子に分割された。第1因子は「ものごとが思ったように進まない場合でも、あなたはその状況に適切に対処できると思いますか」等の質問6項目、各項目内容を検討し因子名として「F1: 自己信頼感」と命名。第2因子は「自分がまわりの環境と一体化して、欠かさない一部であるという所属感を感じるがありますか」等の6項目、「F2: 満足感」と命名。第3因子は「ここ数年やってきたことを全体的に見て、あなたはどの程度幸せを感じていますか」等2項目、「幸福感」と命名。全3因子の累積寄与率は50.64%であった。Cronbach の α 係数は、「F1: 自己信頼感」 $\alpha = .80$, 「F2: 満足感」 $\alpha = .70$, 「F3: 幸福感」 $\alpha = .77$ であった。内的整合性は全下位因子が保たれている。(Table 2)

一方、先行研究(伊藤, 2003)では尺度は、5カテゴリー15項目によって構成されていた。今回抽出された3因子を项目的に検討すると、「F1: 自己信頼感」は「自信」「達成感」の2カテゴリーが一致し、「F2: 満足感」は「人生に対する達成感」「至福感」および、「F3: 幸福感」は「満足感」「至福感」の3カテゴリーに分割充当されている。

主観的幸福感をとらえるため2つの観点が合ったことは先に述べた、一時的な情緒面と、永続的な認知面の両方の視点である。「F1: 自己信頼感」および「F2: 満足感」は、「危機的な状況(人生を狂わせるようなこと)に出会ったとき、自分は勇気を持ってそれに立ち向かって解決していけるという自信がありますか」および「自分が人類という大きな家族の一員だということに喜びを感じるがありますか」等、その認知面を測定し、「F3: 幸福感」は「過去と比較して、現在の生活は幸せですか」等、その情緒面を測定していた。先行研究で、項目や因子の変動が見られ、内容的整合性を検討した結果、本研究では今回の因子分析結果3因子を用いて分析を行っていく。

4-3 対人ストレスコーピング尺度信頼度と因子分析

各因子間に緩やかな相関が予想され因子分析は、主因子法、Promax 回転を行った。因子負荷量の小さい4項目を除外し、残りの30項目で再分析を行った。その結果、固有値を配慮し6因子が抽出された。各因子の因子負荷量 .40以上の項目を検討し、30項目が6因

Table 3. 対人ストレスコーピング尺度 因子分析結果

質問項目	I	II	III	IV	V	VI
F1: ポジティブ関係コーピング ($\alpha = .87$)						
18 積極的に関わろうとした	.86	.05	-.10	.04	.01	-.06
30 積極的に話をするようにした	.78	-.06	-.08	-.19	.10	-.06
15 自分の存在をアピールした	.70	.10	.05	.00	.09	.31
8 たくさんの友人を作ることにした	.68	-.19	.05	-.15	.22	.15
7 あいさつをするようにした	.61	.14	.21	.07	-.03	-.07
34 相手のことをよく知ろうとした	.61	.04	.07	.37	-.03	.04
19 自分の意見を言うようにした	.56	.02	.00	.01	.13	-.04
F2: 逃避型コーピング ($\alpha = .86$)						
29 人を避けた	.07	.81	-.04	.01	-.17	.10
12 友だち付き合いしないようにした	.04	.77	.05	.05	-.12	.15
13 一人になった	.00	.77	-.09	.07	-.06	-.16
24 話をしないようにした	-.05	.58	-.03	-.21	.27	.12
16 かかわり合わないようにした	-.30	.57	.12	.06	.27	.08
20 無視するようにした	.25	.49	-.03	-.26	.02	.25
F3: 忘却型コーピング ($\alpha = .83$)						
27 そのことにこだわらないようにした	-.06	-.19	.91	.07	-.09	.11
26 気にしないようにした	-.03	-.18	.90	-.04	-.08	.12
31 そのことは忘れるようにした	.08	.21	.64	-.17	.01	-.05
28 なんとかかなと思った	.13	-.14	.60	.01	.10	.09
6 あまり考えないようにした	.07	.24	.53	-.16	-.05	-.23
10 こななものだと割り切った	-.06	.17	.51	.11	.12	-.14
F4: 内省型コーピング ($\alpha = .77$)						
1 自分のことを見つめ直した	-.26	.07	-.05	.83	.16	.33
4 相手の気持ちになって考えてみた	-.02	-.03	-.04	.76	.02	.08
2 相手を受け入れるようにした	.05	-.04	.09	.64	.16	-.02
反省した	.08	-.10	-.12	.61	.09	.08
11 相手の良いところを探そうとした	.41	.07	.01	.54	-.12	-.14
F5: リフレーミング型コーピング ($\alpha = .77$)						
21 人間として成長したと思った	.28	-.20	-.03	.04	.65	-.02
17 この経験で何かを学んだと思った	.12	.00	-.16	.30	.60	-.15
32 これも社会勉強だと思った	.14	.15	.05	.09	.53	-.10
22 自分は自分、人は人と思った	-.09	.03	.32	.20	.46	-.23
F6: アグレッシブ関係コーピング ($\alpha = .67$)						
5 相手の鼻を明かすようなことを考えた	.07	.10	.01	.24	-.22	.76
3 相手を悪者にした	-.02	.25	-.01	.05	.01	.61
因子間相関						
I		-.06	.11	.38	.13	-.14
II			.08	-.12	.28	.30
III				.09	.41	.04
IV					.22	-.39
V						.10

子に分割された。第1因子は「積極的に関わろうとした」等の質問7項目、各項目内容を検討し因子名として「F1:ポジティブ関係コーピング」と命名。第2因子は「人を避けた」等の6項目、「F2:逃避型コーピング」と命名。第3因子は「そのことにこだわらないようにした」等の6項目、「F3:忘却型コーピング」と命名。第4因子は「自分のことを見つめ直した」等の5項目、「F4:内省型コーピング」と命名。第5因子は「人間として成長したと思った」等の4項目、「F5:リフレーミング型コーピング」と命名。第6因子は「相手の鼻を明かすようなことを考えた」等の2項目、「F6:アグレッシブ関係コーピング」と命名。全6因子の累積寄与率は52.36%であった。Cronbachの α 係数は、「F1:ポジティブ関係コーピング」 $\alpha = .87$, 「F2:逃避型コーピング」 $\alpha = .86$, 「F3:忘却型コーピング」 $\alpha = .83$, 「F4:内省型コーピング」 $\alpha = .77$, 「F5:リフレーミング型コーピング」 $\alpha = .77$, 「F6:アグレッシブ関係コーピング」 $\alpha = .67$ であった。内的整合性は全下位因子が保たれている。

一方、先行研究では尺度は、3カテゴリー34項目によって構成されていた。今回抽出された6因子を項目的に検討すると、先行研究における第1因子「ポジティブ関係コーピング」は、本研究における「F1:ポジティブ関係コーピング」「F4:内省型コーピング」「F5:リフレーミング型コーピング」に、第2因子「ネガティブ関係コーピング」は、「F3:忘却型コーピング」「F6:アグレッシブ関係コーピング」に、第3因子「解決先送りコーピング」は「F2:逃避型コーピング」の6カテゴリーに分割充当されている。対人ストレスコーピング尺度は、対人関係を原因としたストレスを感じる出来事に対する個人的なコーピングの差を測定する尺度であることはすでに述べた。その際3因子構造となっているが、「ポジティブ関係コーピング」を内容的に検討すると、内省することやリフレーミングすることは行動内容であり、その結果が必ずしもポジティブにならない場合がある。また「ネガティブ関係コーピング」に忘却型の項目が多く含まれており必ずしも否定的行動でないものも少なくない。さらに先行研究には因子負荷量が.35以下の項目が含まれ、項目や因子の変動が見られ、内容的整合性を検討した結果、本研究は、今回の因子分析結果6因子を用いての分析を行うこととした。(Table 3)

4-4 スピリチュアリティ的認知（信念）が主観的幸福感に及ぼす影響

スピリチュアリティ的認知（信念）尺度の各下位因子である「魂の永続性」「人生の意味」「神の守護」「因果応報」「輪廻」「心象の現実化」を独立変数、主観的幸福感尺度の各下位因子である「自己信頼感」「満足感」「幸福感」を従属変数とする重回帰分析を実施した。

その結果、スピリチュアリティ的認知（信念）「人生の意味」が、主観的幸福感「自己信頼感」、「幸福感」に正の影響を及ぼしていた。「人生の意味」を独立変数、「自己信頼感」

が従属変数の場合, $R^2=.26$ でありモデルは有意であった ($F(6,128) = 7.63, p < .001$)。0.01%水準 ($\beta = .46, p < .001$) で, 有意な影響が示された。「人生の意味」を独立変数, 「満足感」が従属変数の場合, $R^2=.18$ でありモデルは有意であった ($F(6,128) = 4.65, p < .001$)。0.01%水準 ($\beta = .35, p < .05$) で, 有意な影響が示された。「人生の意味」を独立変数, 「幸福感」が従属変数の場合, $R^2=.18$ でありモデルは有意であった ($F(6,128) = 4.81, p < .001$)。0.1%水準 ($\beta = .39, p < .001$) で, 有意な影響が示された。(Figure 1)

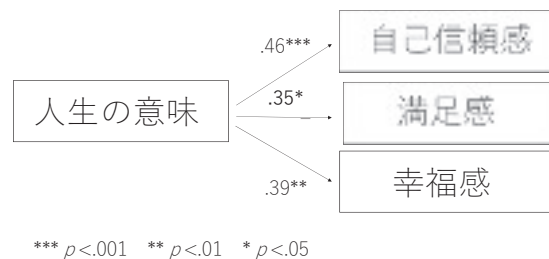


Figure 1. スピリチュアリティ的認知 (信念) が, 主観的幸福感へ及ぼす影響

4-5 スピリチュアリティ的認知 (信念) が対人ストレスコーピングに及ぼす影響

スピリチュアリティ的認知 (信念) 尺度の各下位因子である「魂の永続性」「人生の意味」「神の守護」「因果応報」「輪廻」「心象の現実化」を独立変数, 対人ストレスコーピング尺度の各下位因子である「ポジティブ関係コーピング」「逃避型コーピング」「忘却型コーピング」「内省型コーピング」「リフレーミング型コーピング」「アグレッシブ関係コーピング」を従属変数とする重回帰分析を実施した。

その結果, スピリチュアリティ的認知 (信念) 「人生の意味」「神の守護」「因果応報」が, 対人ストレスコーピング「リフレーミング型コーピング」に正の影響を及ぼしていた $R^2 = .13$ でありモデルは有意であった ($F(6,128) = 3.28, p < .01$)。「人生の意味」を独立変数, 「リフレーミング型コーピング」が従属変数の場合, 0.5%水準 ($\beta = .29, p < .05$) で, 有意な影響が示された。「神の守護」を独立変数, 「リフレーミング型コーピング」が従属変数の場合, 0.5%水準 ($\beta = .29, p < .05$) で, 有意な影響が示された。「因果応報」を独立変数, 「リフレーミング型コーピング」が従属変数の場合, 0.5%水準 ($\beta = -.25, p < .05$) で, 有意な影響が示された。(Figure 2)

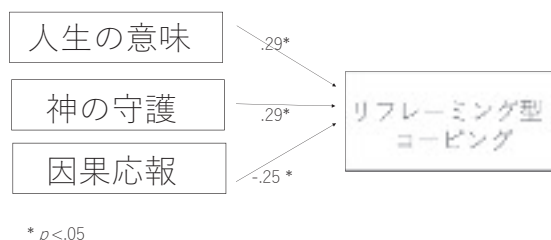


Figure 2. スピリチュアリティ的認知（信念）が、対人ストレスコーピングへ及ぼす影響

5 考察

5-1 スピリチュアリティ的認知（信念）の構造

宗教観を構成する因子は、集団的組織的な客観的側面と個人的認知的側面に分けられ、後者の因子が、適応感やアイデンティティ確立の影響を与えている（山崎，2017）。本調査では、その個人認知的側面をより詳細に測定する尺度としてスピリチュアリティ的認知（信念）尺度を用い、その構造を検討した。

因子分析の結果、「F1：魂の永続性」「F2：人生の意味」「F3：神の御守護」「F4：因果応報」「F5：輪廻」「F6：心象の現実化」の6因子が抽出された。これらの因子項目と、宗教観尺度の因子分析（山崎，2017）における個人的認知的側面に関する因子「F3：守護・見守られ因子」の項目である「守護霊，守護神に守られていると思う」「人間は，心の修行をし，正しい行為を重ねることで，その使命を全うして霊界に戻り，輪廻転生を繰り返しながら高次の段階に進む」「神や仏は存在する」等の内容と比較検討すると，詳細な項目内容としてあらわされていることがわかる。スピリチュアリティ的認知（信念）尺度の6因子構造により，宗教観の個人的認知的側面を表す鍵概念尺度として用いていくことの根拠となった。

5-2 スピリチュアリティ的認知（信念）と Subjective Well-Being（主観的幸福感）の関連

（1）Subjective Well-Being（主観的幸福感）の因子構造

適応指標としての「心の健康」「気分・感情」「認知」尺度として「Subjective Well-Being（主観的幸福感）」尺度の構造を検討した。因子分析の結果「F1：自己信頼感」「F2：満足感」「F3：幸福感」の3因子が抽出された。Subjective Well-Being（主観的幸福感）を認知的側面と情緒的側面との両面でとらえることができた。「F1：自己信頼感」が認知

的側面,「F2:満足感」は情緒的側面,「F1:3幸福感」も情緒的側面で構成されている。先行研究(伊藤,2003)は5因子構造であったが,項目内容を検討した結果,3因子構造に収束させた。

(2) スピリチュアリティ的認知(信念)の Subjective Well-Being(主観的幸福感)への影響

重回帰分析の結果,スピリチュアリティ的認知(信念)「F2:人生の意味」が Subjective Well-Being(主観的幸福感)「F1:自己信頼感」「F2:満足感」「F3:幸福感」に影響を及ぼしていた。「F2:人生の意味:人生で起こる出来事や,人との出会いは,あなたが人間として必要なことを学び成長するために,見えない縁によってやってきます。単なる偶然ではないのです。」等「見えない縁」のような超自然的認知や存在を意識することが,「F1:自己信頼感:危機的な状況(人生を狂わせるようなこと)に出会ったとき,自分は勇気を持ってそれに立ち向かって解決していけるという自信がある」や「F2:満足感:自分がまわりの環境と一体化して,欠かせない一部であるという所属感を感じる」「人生が面白いと思う」「自分が人類という大きな家族の一員だということに喜びを感じる」等の Subjective Well-Being(主観的幸福感)の認知的側面に影響を及ぼし,「F3:幸福感:過去と比較して,現在の生活は幸せである」Subjective Well-Being(主観的幸福感)の情緒的側面に影響を及ぼしていることが明らかとなった。しかし,各重相関係数は, $R^2=.26$, $R^2=.18$, $R^2=.18$ であり,スピリチュアリティ的認知(信念)「F2:人生の意味」の, Subjective Well-Being(主観的幸福感)「F1:自己信頼感」「F2:満足感」「F3:幸福感」へ影響の全てを説明するものではない。「F2:人生の意味」は,「F1:自己信頼感」「F2:満足感」「F3:幸福感」へ影響を及ぼす一要素であることが示唆されたとすることが妥当である。

5-3 スピリチュアリティ的認知(信念)の対人的ストレスコーピングの関連

(1) 対人的ストレスコーピングの因子構造

適応指標として「行動」「認知」の尺度である「対人ストレスコーピング」の構造を検討した。「F1:ポジティブ関係コーピング」「F2:逃避型コーピング」「F3:忘却型コーピング」「F4:内省型コーピング」「F5:リフレーミング型コーピング」「F6:アグレッシブ関係コーピング」の6因子が抽出された。先行研究(加藤,2000)は3因子構造であったが,先行研究において因子負荷量・35以下の項目等が複数含まれていたために項目の精選,及び内容的妥当性等の吟味を行った結果,6因子構造に収束させた。

(2) スピリチュアリティ的認知(信念)による対人的ストレスコーピングへの影響

重回帰分析結果、スピリチュアリティ的認知（信念）「F2：人生の意味」「F3：神の守護」「F4：因果応報」が対人的ストレスコーピング「F5：リフレーミング型コーピング」に影響を及ぼしていることが明らかになった。「F2：人生の意味」や「F3：神の守護：人として良心に従って、できる限りの努力をする人には、必ず神様の助けが得られます。自分にとって良い方へいくように、守ってくれるのです。」等、超越した存在によって見守られていること、「F4：因果応報：他人に与えたのと同じものが、必ず自分へ戻ってきます。誰にも知られないように親切な行いをする、それがめぐりめぐって自分のところに戻ってくる。」等、善い行いには善い結果が得られ、悪しき行いには悪しき結果が与えられると思うこと等が、「F5：リフレーミング型コーピング：人間として成長したと思った。この経験で何かを学んだと思った。これも社会勉強だと思った。」等、ストレス事態を、ネガティブな経験と捉えず、自らの成長や学習として再構成し、適応的行動を選択する対人ストレスコーピングに影響を及ぼしていることが明らかとなった。しかし、それぞれ重相関係数 $\beta^2=.01$ であり、スピリチュアリティ的認知（信念）「F2：人生の意味」「F3：神の守護」「F4：因果応報」の、対人的ストレスコーピング「F5：リフレーミング型コーピング」へ影響を十分に説明するものではない。「F2：人生の意味」「F3：神の守護」「F4：因果応報」は、「F5：リフレーミング型コーピング」へ影響を及ぼす要素のいくつかになっているとすることが妥当である。

5-4 考察要約

本研究は、宗教観の個人的認知的側面に注目し、認知行動的セルフモニタリング構造（山崎，2013）において、その認知（信念）が、適応行動・感情に影響を与えることを明らかにするために、宗教観構造因子の個人的認知的側面であるスピリチュアリティ的認知（信念）を独立変数として分析を行った。その結果、従属変数である適応指標として「心の健康」「気分・感情」「認知」の尺度である「Subjective Well-Being（主体的幸福感）」に影響を与えることが明らかとなった。スピリチュアリティ的認知（信念）「F2：人生の意味」が、Subjective Well-Being（主観的幸福感）「F1：自己信頼感」「F2：満足感」「F3：幸福感」のすべてに影響を及ぼしていた。

もう一つの従属変数である適応指標として「認知」「行動」の尺度である「対人ストレスコーピング」に影響を与えていることが明らかになった。スピリチュアリティ的認知（信念）「F2：人生の意味」「F3：神の守護」「F4：因果応報」が、対人ストレスコーピング行動としての「F5：リフレーミング型コーピング」に影響を及ぼしていた。

WHOにより宗教観・宗教性・スピリチュアリティの重要性が提唱され、社会適応や精

神的健康との関連が検討されながらも、日本においては実証的研究の数は多くない。また、スピリチュアリティ概念の研究は行われているが、スピリチュアリティ的認知（信念）と日常行動や適応的変数との関連をエビデンスに基づいて明示している研究は少ない。本研究で、スピリチュアリティ的認知（信念）が「Subjective Well-Being（主体的幸福感）」と「対人ストレスコーピング」行動の選択に及ぼす影響が、具体的に明らかになった。

6 今後の課題

本研究は調査開始時の3仮説が設定され、仮説は証明されることとなった。本調査は「スピリチュアリティ的認知（信念）尺度」「主観的幸福感尺度」「対人ストレスコーピング尺度」を用いて実施された心理的統計処理、因子分析・多変量解析・重回帰分析に、必要な十分なサンプル数であったため、結果・考察および仮説の一般的証明がなされた、しかし、被験者サンプルの偏りが課題となった。すなわち女子青年のみを対象として実施したため、先行研究（山崎，2017）で確認された性差行動や認知に関して検討することができなかった。青年期の男女性差に関する研究が今後求められる。

引用・参考文献

- ・安藤治（2007）現代のスピリチュアリティ スピリチュアリティの心理学 セセらぎ出版 pp11-33.
- ・Diener, E., Suh, E. M., Lucas, R. E., & Smith, H. L. (1999) Subjective well-being: Three decades of progress. *Psychological Bulletin*, 125, 276-302
- ・Elkins, D. N.; Hedstrom, L. J.; Hughes, L. L.; Leaf, J. A.; Saunders, C. (1988) "Toward a Humanistic-Phenomenological Spirituality Definition, Description, and Measurement". *Humanistic Psychology* 28 (5-18) : 8.
- ・藤井美和（2010）生命倫理とスピリチュアリティー死生学の視点から晃洋書房 pp.1-27晃洋書房
- ・具志堅伸隆（2011）素朴な信仰心に関する基礎的研究（4）「（短縮版）スピリチュアリティ的信念尺度」の作成および主観的幸福感との関連性についての検討 日本心理学会第75回大会
- ・堀江宗正（2007）日本のスピリチュアリティ言説の状況 スピリチュアリティの心理学 セセらぎ出版 pp141-154
- ・井上順孝 学生意識調査総合分析（1995年度～2015年度）國學院大學日本文化研究所紀要 2018
- ・井上順孝 学生意識調査総合報告書（1995年度～2015年度）國學院大學日本文化研究所紀要 2017
- ・井上順孝（2014）21世紀の宗教研究 一脳科学・進化生物学と宗教学の接点 平凡社

- ・井上順孝（2012）新宗教研究と認知科学・ニューロサイエンス 國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報 第5号
- ・石井研士（1997）データブック現代日本人の宗教一戦後50年の宗教意識と宗教行動 新曜社
- ・石井研士（2007）データブック現代日本人の宗教〔増補改訂版〕新曜社
- ・伊藤雅之（2003）現代社会とスピリチュアリティ現代人の宗教意識の社会学的探求 溪水社
- ・伊藤雅之，樫尾直樹，弓山達也編（2004）スピリチュアリティの社会学 世界思想社
- ・伊藤裕子他（2003）主観的幸福感尺度の成と信頼性・妥当性の検討 心理学研究 74（3），pp.276-281
- ・金児暁嗣（1997）日本人の宗教性 新曜社
- ・河合隼雄（2000）現代人と宗教 アステイオン，53，pp.11-21
- ・加藤司（2000）大学生用対人ストレスコーピング尺度の作成教育心理学研究，48，225-234
- ・加藤司（2002）対人ストレス過程における社会的相互作用の役割 実践社会心理学研究，41，pp.147-154.
- ・加藤司（2003）対人ストレスコーピング尺度の因子的妥当性の検証 人文論究52（4），pp.56-72
- ・樫尾直樹（2002）スピリチュアリティを生きる せりか書房
- ・Koenig HG（1988）Religion and a Social Stress Model: Koenig HG, Smiley M, Gonzales JAP（Eds）Religion, health, and a aging. Greenwood Press, pp93-101.
- ・Koenig HG（2008）Medicine, Religion, and Health: Where Science and Spilituality Meet. Templeton Foundation Press.
- ・小池靖（2000）ニューエイジとセラピー文化.文化論の視点から 宗教と社会.1（6）
- ・窪寺俊之（1997）危機体験とスピリチュアリティ 神學研究，44，pp.207-259
- ・西平直（2007）スピリチュアリティ再考 スピリチュアリティの心理学 せせらぎ出版 pp.71-90
- ・尾崎真奈美・石川勇一・松本孚（2004）相模女子大生のスピリチュアリティ特徴と「スピリチュアル教育」マニュアル作成の試み 相模 女子大学紀要，68，pp.31-46
- ・世界保健機関（WHO）憲章|公益社団法人 日本 WHO 協会
<https://www.japan-who.or.jp/commodity/kensyo.html>
- ・島蘭進（2007）スピリチュアリティの興隆 新霊性文化とその周辺 岩波書店
- ・谷芳恵（2007）大学生の宗教観と幸福感に関する心理学的研究神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要第1巻第1号，17-24
- ・山崎洋史他（2017）知ることの仕組み認知・記憶，人と人との関係，認知行動療法 「メンタルヘルスと心理学」（共著）学文社 pp.12-26，pp.195-201
- ・山崎洋史（2018）宗教観が青年期適応に及ぼす影響 宗教研究91巻別冊 第76回学術大会紀要 日本宗教学会

- ・ 山崎洋史（2017）宗教観と青年期適応に関する研究—宗教観・信仰の有無と適応感・アイデンティティ確立の因子相関—國學院大學大学院紀要—文学研究科—第48號 pp.61-77
- ・ 山崎洋史（2017）宗教観が青年期適応に及ぼす影響—認知行動的変数相関—宗教研究 90巻別冊 第75回学術大会紀要 日本宗教学会
- ・ 山崎洋史（2016）宗教観が青年期適応に及ぼす影響 宗教研究 第89巻別冊 第74回学術大会紀要 日本宗教学会
- ・ 山崎洋史（2015）宗教観がアイデンティティ確立と適応に及ぼす影響 宗教研究第88巻別冊 第73回学術大会紀要 日本宗教学会
- ・ 山崎洋史（2012）食行動異常と認知行動的セルフモニタリングの関連—青年期の過食行動から 学校教育相談研究22 日本学校教育相談学会
- ・ 弓山達也（2010）日本におけるスピリチュアル教育の可能性 宗教研究 第84巻2号